

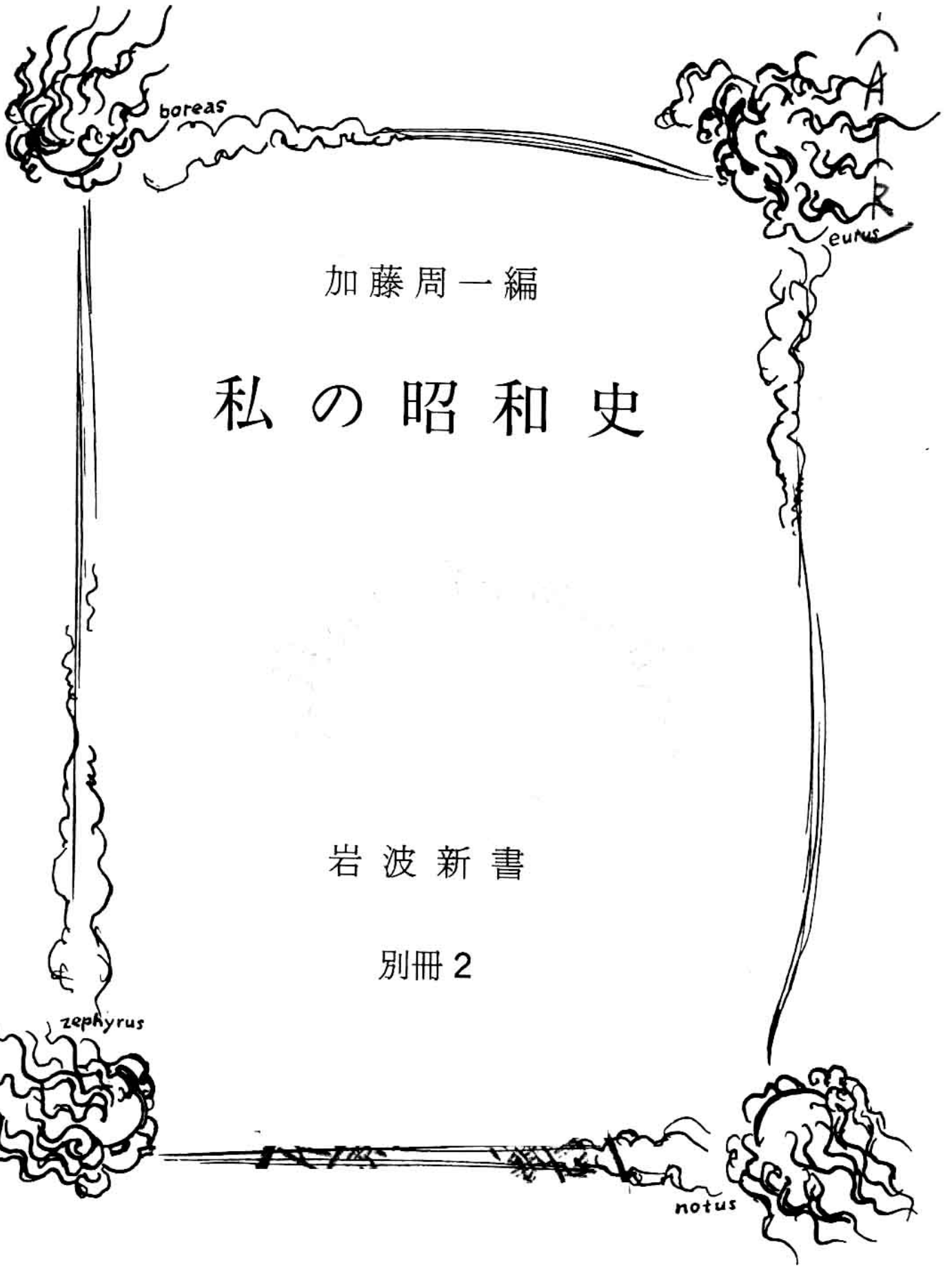
加藤周一編

私の昭和史



岩波新書

別冊2



加藤周一編

私の昭和史

岩波新書

別冊 2

加藤周一

1919年東京に生まれる

1943年東京大学医学部卒業

専攻—小説, 評論, フランス文学

現在—立命館大学客員教授

著書—「羊の歌」(正・続, 岩波新書)

「日本文学史序説」(上・下, 筑摩書房)

「加藤周一著作集」(全15巻, 平凡社)

「夕陽妄語」(朝日新聞社)

私の昭和史

岩波新書(新赤版) 別冊2

1988年11月21日 第1刷発行 ©

定価 480 円

編 者 かとうしゅういち
加 藤 周 一

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-439002-8

目次

さまざまな昭和史——編者まえがき……………加藤周一……………1

私の昭和史(入選作品)

ある伝言……………天沼登美子……………15

渚の五十五年……………川口祐二……………31

鮮烈な記憶……………酒井與郎……………47

八路軍と共に八年……………本間雅子……………61

一台湾人の昭和史……………楊威理……………77

闇に消える同時代史……………宇敷民夫……………97

つかの間の明るさ……………柴田仁……………113

小さな新聞記事	市東真弓	127
戦争・レッドパーズ・がん	益子純一	141
女八十七年を生きる	古谷竹野	157
空白の部分	中谷君恵	175
幻想家族	今野さなへ	191
ある技術者の軌跡	卯之木十三	205
熱帯医遍歴	田淵四郎	219
一畳半の女たち	金子千寿子	235

さまざまな昭和史
—— 編者まえがき

加藤周一

多様な「戦争体験」

「昭和史」は、第一次大戦と関東大地震の後一九二〇年代の末に始まり、十五年戦争・戦後の民主化・経済的繁栄を経て、今日に及ぶ。この本は、その時代を生きてきた人々の証言である。

岩波書店の「新書」編集部は、「私の昭和史」という題で、広く読者の文章を募った。応募六四九篇、そのなかから編集部が援けをかり、私の択んだのがここに収めた諸篇である。撰択の基準は、第一に、内容および、または表現が、この本の読者にとって面白いだろうということ、第二に、採録の文章の全体に、著者の年齢や性別、また題材の種類をも含めて、できるかぎりの多様性のあることである。したがって収録できなかった文章が、収録した文章よりも、論文として、必ずしもその出来栄えに劣るということではない。収録できなかったものにも、すぐれたものがある。

応募六四九篇の著者の圧倒的多数は、六〇歳前後で、男が多い。そこから一五篇を採るのに、各年齢層を含めることは、きわめてむずかしい。八〇代の高年齢者と二〇代の若者の発言のそれぞれ一篇を例外として、この本は昭和時代と生涯を共にした人々の証言ということになる。性別については、応募者に男が多いにも拘わらず、採録した一五篇では男女がつり

合っている。これは編者が意識してそうしたからではなく、女の文章に内容・表現のすぐれたものが多かったからである。

証言の内容には、いわゆる「戦争体験」が多い。六〇年以上に及ぶ昭和史の、戦争は一五年間のことにすぎないから、これは不思議なことのようにみえる。しかし戦争の時代を経験した人々にとっては、その経験こそが生涯を通じて決定的な意味をもったのであろう。日本国内で、台湾で、中国大陸で、また太平洋の多くの島々で、あるいは兵士として、あるいは入植者その他の非戦闘員として、人々は戦争を経験した。その内容は、実に多岐にわたっている。

たとえば酒井與郎氏は、学徒兵(獣医)として中国大陸に転戦し、敗戦直後、所属大隊の司令部にどなり込んできた朝鮮人の元従軍慰安婦に出会う。彼らを日本の役人は半強制的に連行し、利用し尽した後うち捨てて顧みようとしなかった。その数は万をもって算えるという。そういう女の一人にどなり込まれては、返す言葉もないはずである。

酒井氏はまた、国共内戦の国民党軍が、降伏した日本軍将校を扱うことの丁重なことに驚愕し、「私はこの時ほど私が、そして日本が、惨めに思えたことは今までにない」という。同じような経験は、大陸で敗戦を迎え、憲兵であった夫が八路軍に連れ去られた後、みずからは八路軍の病院で働くことになった本間雅子氏の場合にも、みられる。はじめは不本意で参

加しながら、八路軍と共に行軍し、「苦楽を共にした八年の間に、新中国建設のためと思うように」なる。敗戦は、大陸にあった日本人の一部をして、中国人との人間としてのつき合いを発見させた。

戦争は、また、当時の青年にとって、徴兵と特高警察とを同時に意味したこともある。兵役から解放されると特高に逮捕され、投獄され、執行猶予で釈放されると徴兵で外地へ送られた。そういう経験をした一人、柴田仁氏は、戦前の昭和史は「暗黒」であったという。「敗戦後の一時期は明るかった」。「しかしその明るさもつかの間」であり、一九六〇年代の末には、かつてデッチ上げの調書に署名を強制した特高の警部補が、警察学校校長になるような時代が来る。ナチ戦犯の時効さえも廃止した（一九七九年）西独で、「ゲシュタポのメンバーが戦後の警察機構の高官になる」ことはないだろう。それに類したことのおこる「奇怪さが奇怪でないのが日本の現状」である。

太平洋戦争のために、父親と上の娘が米国で、母親と末の娘が日本で、音信不通のまま暮した家族もある。父親は米国で亡くなり、上の娘は強制収容所へ行く。日本の母子家庭の戦時中の辛苦はいうまでもない。その姉妹が戦後再会する話は、末の娘「中谷君恵氏の文章に詳しい。そこでは話が家族を超えて、日系米国人が戦争のためにどういう犠牲を強いられたかということが語られている。

このように「戦争体験」は、その多様性の一端を、この本のなかでも、十分に示している。しかし、もちろん、これがすべてではない。むしろこの本の証言は、原民喜や井伏鱒二の原爆についての、大岡昇平のフィリップン戦線についての文芸作品を補足し、またすでに発表されてきた多くの証言を補足するものである。他方、戦争を肯定あるいは讚美する説得的な文章は、私の見た応募原稿のなかにはなかった。戦争体験が当人にとって不快でなく、むしろよき想い出として残されている場合もあるにちがいないから、この本の証言は、日本人全体の「戦争体験」の一面だということになる。しかしこれこそは貴重な一面であると思う。

「私」への集中と日本文化

「私の昭和史」という題は、二様に解釈することができる。その一つは、「私の生きた(経験した)昭和史」という意味で、「私」の経験はそのまま昭和史の一部分である。「私」が六〇歳またはそれ以上であれば、その生涯の経験が昭和史の全体と重なるだろう。もう一つは、「私の見た(理解した)昭和史」という意味で、その場合の「私」は、歴史の部分ではなく、歴史を理解する主体である。歴史の理解のし方は人によって異なるから、たとえば遠山茂樹氏等の『昭和史』(岩波新書)は、遠山氏等の昭和史と考えることができる。同様に「私」が理解した昭和史の要約は、「私の昭和史」といえるだろう。原則として、その場合の「私」の年齢

や国籍は問題にならない。

しかるに応募論文の圧倒的多数は、第一の解釈を採って、第二の解釈を採らない。六〇年以上に及ぶ昭和年間には、無数の事件があった。歴史の方向を決定する上に、どの事件が重要であり、どの事件が重要でなかったか。もし重要な事件を節目として昭和史を区分するとすれば、どういう区分が成り立つか。たとえば一九三六年は、二・二六事件、軍部大臣現任武官制、日独防共協定、スペイン戦争の年である。この年を、戦争を拡大しつづけて遂に真珠湾攻撃に至った日本の三〇年代の節目として、理解すべきかどうか。またたとえば一九五〇年代の「朝鮮戦争景気」は、戦後の日本経済史を、復興の前期と拡大成長の後期に分かつ節目と考えるべきものかどうか。——そういう問題について著者の意見を述べ、その意味で「私の昭和史」を主張する論文は、ほとんどなかった。そうではなくて、ほとんどすべての文章は、その著者自身の経験を叙述するという点で、共通していた。何故だろうか。

もちろんその技術的な理由は、あきらかである。一枚四〇〇字二〇枚で、昭和史の全体の流れを論じることは、誰にとっても困難である。もし話題を絞るとすれば、まず「私の昭和史」を「私の経験した昭和史の一部分」と解するのが、便利なはずであろう。しかし、おそらくそれだけが理由ではない。なぜなら多くの人々は、みずからどうしても言っておきたいことを言い、書いておきたいことを書こうとしたにちがいないからである。それが、「私」の

経験であって、「私」と直接には係わらない歴史の全体ではなかった。歴史は、「私」の経験の条件であるが、経験そのものではない。そうではなくて、「私」の経験のすべてがそこで成立する世界の、時間的構造である。

一方には、直接で、なまなましく、具体的、個別的で、部分的な「私」の経験があり、他方には、間接で、対象化され、抽象的、普遍的な「歴史」の全体がある。ものの方や考え方が、その「私」の方に集中してゆく傾向は、日本の文化の強い伝統の一つであった。たとえば徳川時代の後半に広く普及した石門心学は、「私」のおかれた歴史的環境ではなく、「私」の心のあり方を追求し、そこに倫理的価値の基礎を見出そうとした哲学である。各々その「分をまもり」、「私心なきこと」が理想とされる。その「分」を決定したのは、「歴史」であり、「私心」があるかないかを決めたのは「私」の内側のことであろう。すなわち、あたえられた「分」をまもるといふことで、「歴史」を括弧に入れ、「私心」の有無を問題にすること、**「私」**の内部に話を集中したのである。

またたとえば明治以後の日本文学の主流の一つは、いわゆる「自然主義私小説」であった。「自然主義」の方は、ゾラやモーパッサンに代表される西洋文学から借りた概念である。しかしそれは誤解にもとづいていて、ゾラやモーパッサンは、決して「私小説」を書かなかった。「私小説」の方は、日本文化の伝統に根ざし、「私」の経験の情緒的な面を叙述する。そ

の影響は、学校教育にも及び、日本の学校での「作文」の訓練は、その主眼を、「私」の経験の情緒的な表現においてきた。これは西洋諸国（の少なくとも一部）の学校が、生徒の「作文」において、対象の客観的な叙述と議論の論理的な秩序を重視するのとは、全く対照的である。日本の文章は、一般に、著者がその人自身の「体験」を語るときに、細かく感情の襲に分け入り、豊かな表現を示すことが多い。そのことが、この本のなかの証言にも反映しているといえるだろう。

個別性と普遍性

しかし個別的な現象の特殊性をつきつめればつきつめるほど、そこに普遍的な意味のあらわれてくることもある。個人の特殊な経験が、時代を反映するばかりでなく、鋭く時代を象徴することがあり、そこでは個人史と昭和史とが重なる。そういう面が、たとえば、農家の女の一生を語った古谷竹野氏の文章や、戦時中は工場で働き、敗戦後国語教師となり、結婚して経済的復興と「家庭の内面からの崩壊」を経験した今野さなへ氏の文章にはある。小作農家の貧窮の背景に世界恐慌があり、農家の働き手の召集や女学生の工場動員の背景に戦争があることはいうまでもない。「家庭の内面からの崩壊」も、物質的繁栄と精神的貧困によって特徴づけられるだろう高度成長期以後の日本社会を、よく象徴する。

川口祐二氏は、三重県熊野灘の漁村の渚に、話をしばっている。一九三〇年代は「間引」で始まった。不況で窮乏した漁村の女たちは、一九三一年に出生児の半数をみずから扼殺したという。そうしなければ、生きてゆけなかったからである。警察がその女たちを逮捕して連行した渚は、戦時中には国防婦人会に組みこまれた女たちが出征兵士を見送る場所となり、戦争の末期には兵士の訓練場となる。戦後は、真珠養殖と遠洋漁業による好景気がつづくと同時に、渚には海水汚染がおこり、赤潮が押しよせる。そういう公害の渚に、止めをさしたのが「開発」であり、漁港が建設されて、渚は消滅する。かくして川口氏の渚の「間引」(すなわち不況)・戦争・戦後景気・公害・開発という五段階は、そのまま昭和史の五段階に他ならない。

他方、益子純一氏は、主計下士官としての戦時の軍隊生活、占領下の「レッド・ページ」(一九五〇年)と独立後解雇の不当を訴える法廷闘争、最近の胃がん闘病という三点に集中して、その経験を語っている。なぜその三点だろうか。まず一世代の青春は戦争によって決まり、戦後の日本の方向は「レッド・ページ」と朝鮮戦争の一九五〇年に撰択され、高度成長の後個人を脅かす最大の脅威は病、殊にがんになったからであろう。そう考えれば、ここでも、「私」の生涯と「歴史」とは重なり、両者の節目は一致する。益子氏は、川口氏と同じように、そのことを鋭く意識し、個人的経験を通しての昭和史を叙述した。

しかし歴史との係わりを意識せず、あるいはその係わりの意味を問おうとせず、時と共に移る個人の経歴を叙述し、結果としてそれが時代と社会を反映することもある。たとえば、戦時中に航空機の設計を志し、戦後新幹線の車両設計に参加し、今日防災設備の専門家となっている技術者、卯之木十三氏の場合が、そうである。こういう有能な技術者の集団が、それぞれの技術的問題を解決することで、かつては大日本帝国の軍事力を支え、今では経済大国日本の工業技術をつくり出した。軍用機の機体の設計も、高速鉄道の車体の設計も、その過程で流体力学の問題を解かなければならないという点では、共通している。秀れた技術者はそのいずれにおいても能力を発揮するのであり、さらに一般的な技術的問題の解決法や総合的な組織力の経験は、トンネルの防災設備の開発にも役立つのである。

軍用機と新幹線と青函トンネルの用途は異なる。その用途を決めるのは、技術者ではなくて、一時代の社会である。戦争、経済的効率、あるいは用途不明瞭。そこには、あきらかに、昭和史の段階が反映している。しかし、そのことに技術者が意識的であるとは限らない。用途あるいは究極の目的は、技術者にとっては与えられたものであり、その関心は与えられた目的に適合した手段をつくり出すことである。手段をつくり出す過程は、歴史的思考ではなく、力学的思考であり、そこに昭和史は反映しない。卯之木氏の叙述に、目的そのものの検討や批判が、全くみられないのは、おそらく偶然ではないだろう。戦争の批判はなく、経済

的効率のみを社会が追求するとき何がおこるだろうかということへの反省はなく、そもそも経済的効率の正確な評価がなくて青函トンネルに巨大な投資をしたことの政治・経済・社会的意味の検討はない。それは技術者の技術者としての思考の範囲を超える問題であり、市民としての、また人間としての問題である。

一般に戦後の日本社会の全体が、技術的な思考によって特徴づけられている、といえるのかも知れない。技術的な思考は、知識の専門化と、専門家集団の官僚的組織を伴う。そういう組織の特徴は、能率という価値の支配、環境を統御する能力の増大、強い惰性と基本的な目標を変えることの困難、それ自身の巨大化する傾向、したがって権力の集中などである。それは決して、日本社会だけの現象ではなく、二〇世紀後半のすべての先進工業社会においていよいよ著しい現象である。その一般的傾向が、よい意味でも（経済的繁栄）、わるい意味でも（民主主義の後退）、誇張されてあらわれているのが、日本社会であり、そのことの証言として卯之木氏の文章は、まことに興味深いものである。

近接の視点

個人史は日本の昭和史の一部分であり、昭和史は二〇世紀の世界史の一部分である。この小さな本に収録する個人の経験の証言は、それ自身が感動的であるばかりでなく、また日本